

インド文法学における  
samjñāsamjñīsambandha の一考察  
—nityapakṣa と kāryapakṣa の観点から—

本 田 義 央

0. 序

インド哲学における言語観には、恒常論 (nityapakṣa) と所作論・非恒常論 (kāryapakṣa) という大きな二つの流れがある。前者は、言葉 (śabda) が作られるものではなく、恒常である、と考える見解である。そして、後者は、言葉は「作られたもの」(kārya) であり、つまり、恒常ではない (anitya) と考える見解である。前者はミーマーンサー学派によって、そして、後者は、言葉を聴覚によって捉えられるところの物理的音声としての側面からだけ捉えるヴァイシエーシカ学派によって代表される。<sup>1)</sup>

本稿では、パーニニ派文法学 (pāṇinīyavyākaraṇa) 体系の中で、これら二つの基本的な立場の相違が、名称 (samjñā) と名称保持者 (samjñīn)、そしてそれら両者の関係 (sambandha) にかかわる議論のなかに、どのように反映されるのか、ということを検討する。この議論は、その性格上、名称規定規則 (samjñāsūtra) と操作規則 (vidhisūtra) の解釈と実際の運用の際に取りあげられている。そして、その多くの場合、名称と名称保持者に関わって、相互依存 (itaretarāśraya, anyonyāśraya) 誤謬のおこる可能性が指摘されている。<sup>2)</sup> そこで、この相互依存誤謬発生の構造とその回避策を、一つの手がかりとしてみたい。

## 1.

anyonyāśraya または itaretarāśraya は、一般に「相互依存」(‘mutual dependence’) 等と翻訳される。そして、後代にニャーヤ学派等において帰謬法 (prasaṅga) の意味が付与されるタルカ (tarka) の下に分類されていることからもうかがわれるように、ある論理的な悪循環を意味している。<sup>3)</sup> そしてそれはまた、インド文法学の議論の中でも見いだされる。しかし、それらが文献中にしばしばみられるにもかかわらず、その構造はこれまで十分に明らかにされてきてはいないように思われる。

まず始めに、本論文の議論に直接関わるものではないが、文法学の中で、相互依存が問題とされるよく知られている事例をみておこう。<sup>4)</sup> ここでの問題は縮約表現 (pratyāhāra) の形成に関わる。P 1. 3. 3 halantyam // は、『シヴァーストトラ』(Śivasūtra : ŚS) や『ダートウパータ』(Dhātupāṭha : DhP) 等という教示 (upadeśa) 中の、最終の子音が指標辞 (IT=anubandha) であることを規定している。<sup>5)</sup> この規定を前提とし、P 1. 1. 71 adir antyena sahetā // に基づいて、ŚS 5 の最初の h と ŚS 14 の最後の L を用いて、全子音を表す縮約表現 haL が形成される。

しかし、ここで問題は、各 ŚS の最終子音が IT であることを規定しているはずの P 1. 3. 3 それ自体が、IT である子音を用いて P 1. 1. 71 によって形成された haL という縮約表現を含んでいることである。ŚS 14 の L が IT でなければ、hal が全子音をあらわすことはできないはずである。P 1. 3. 3 と P 1. 1. 71 はお互いに他方を期待している。つまり P 1. 3. 3 は P 1. 1. 71 によって形成される縮約表現を期待しており、一方 P 1. 1. 71 は P 1. 3. 3 によって規定される IT を期待している。ここで、P 1. 3. 3 と P 1. 1. 71 の両者は「相互依存」している、ということができ、この場合、それらは定義として、意味をなし得ないということが明らかである。

しかし、もしこれら両者とは別の規則によって ŚS 14 ha l // の l が IT であることが規定されているならば、次のような手順で相互依存を回避すること

が可能となる。

- (1) ŚS 14 ha 1// の 1 の IT 化
- (2) P 1. 1. 71 に基づく全子音を表す縮約表現 haL の形成
- (3) P 1. 3. 3 による各 ŚS 最終子音の IT 化

この問題を BM は、P 1. 3. 3 を二回繰り返してからそれらの内の片方をのこしたものと解釈することにより解決している。即ち、P 1. 3. 3 は ‘halantyam halantyam’ と繰り返して読まれるべきであり、その片方のみを残して規則 P 1. 3. 3 が形成されていると考えるのである。その場合、片方の halantyam 中の hal は、全子音を表す縮約表現としての haL ではなく、ŚS 14 ha 1// である。これにより、先ず最初に ŚS 14 ha 1// の 1 を IT と規定することができる。これで上の(1)は達成された。次にこの IT と呼ばれることとなった ŚS 14 中の 1 を利用して、P 1. 1. 71 によって全子音を表す縮約表現 haL を規定することが可能となる(2)。さらに、この段階で haL は全子音を表し得る。そして、P 1. 3. 3 の重複された ‘halantyam’ のうち残りの片方の hal がこの全子音を表す haL であると解釈すれば、各 ŚS 中の最終子音を IT と呼ぶことができる。以上のようにして、ここで問題となる P 1. 1. 71 と P 1. 3. 3 の相互依存は回避される。

## 2.

さて、ここで、恒常論 (nityapakṣa) と所作・非恒常論 (kāryapakṣa) について見ておかねばならない。<sup>6)</sup>

この語恒常論及び非恒常論は、siddhe śabdārthasambandhe // (vt 3 on Paspasāhnikā) に対する『パーシャ』中で議論されている。この『ヴァールツァティカ』の解釈の際に問題となるのは、先ず、siddha という語の意味であり、また śabdārthasambandhe という語合成の解釈である。

『パーシャ』は先ず、語合成に関して、siddhe śabde 'rthe sambandhe ca という成分分析文 (vighrahavākya) を提示する。次に、siddha という語の解釈に移る。この siddha という語は、nitya と anitya 双方に解釈しうることから、

反論が想定される。siddha という語は、それぞれ、たとえば、「大地は恒常である (siddhā pṛthivī)」という意味で用いられるし、また「飯が出来ている (siddha odanaḥ)」という意味でも用いられる。前者の場合には、恒常と考えられる大地のことを 'nitya' と述べているのであるから、'siddha' が、「恒常」を意味する、と考えると問題はない。しかし、後者の場合、siddha は「出来た」、つまり恒常ではない結果 (kārya) である「飯 (odana)」に、言及している。この場合、'siddha' は、非恒常・所作であることを示すことになる。なぜなら、恒常なものが「出来上がる」、ということはないからである。しかし、目下の『ヴァールティカ』での 'siddha' は、恒常 (nitya) の意味であり、それを直接 'nitya' とヴァールツティカが述べないのは、maṅgalārtha である、という一つの回答が与えられている。<sup>7)</sup>

その後、『パーシャ』は、語合成 śabdārthasambandhe の異なった解釈を含む数々の議論の後に、再度、'siddhe śabde 'rthe sambandheca' という成分分析文 (vīgrahavākya) による解釈を提示する。言葉・意味・関係という三者が siddha である、というのである。ここで、siddha は、nitya を意味している。この点について、Kaiyaṭa は、śabdārtha は、知における現れ (buddhipratibhāsa) であるとのべており、更に、Nāgeśa は、この個所を注して、svarūpa を欠いた「ウサギの角 (śaśaśṛṅga)」などの場合にも、問題はないと述べている。その訳は、言語に基づく認識 (śabdabodha) に関して、外界の事物 (bāhyaḥ padārthaḥ) というものが対象 (viśaya) であるのではなく、知におけるもの (baudha) が対象であるからである。<sup>8)</sup>

### 3.

さてここで、nityapakṣa と kāryapakṣa が、実際のパーニニ規則に基づく文法操作に関わって、議論される事例を検討しよう。主として取り挙げる規則は、P 1. 1. 1 vṛddhir ādaic // 及び P 1. 1. 45 ig yaṇaḥ saṁprasāraṇam // である。

まず P 1. 1. 1 vṛddhir ādaic //。この規則は ā, ai 及び au の三母音が名称

vṛddhi をもって呼ばれることを規定している。P 7.2.114 mrjē vṛddhiḥ // は、動詞接辞 (dhātupratyaya) が後続する場合、動詞語根 mrj の 〈aṅga〉 の iK に vṛddhi が代置されることを規定している。<sup>10)</sup> mārṣti (3rd., sg., Pres.) の派生では、P 3.4.69 laḥ karmaṇi ca bhavē cākarmakebhyaḥ //, P 3.2.123 vartamāne laḥ // 等をへて、さらに P 3.1.68 kartari śap // による ŚaP の導入、そしてさらに、2 種動詞の場合の ŚaP への LUK (ϕ) 代置を規定した P 2.4.72 adīprabhṛtibhyaḥ śapaḥ [58 luk] // が適用され、mrj + ti となり、ここで、P 7.2.114 mrjē vṛddhiḥ // により  $\sqrt{\text{mrj}}$  の r 音に a 音が代置される。P 1.1.51 ur aṅ raparaḥ // に従って、その a 音は後続する r を伴うから、mārj + ti となる。さらに P 8.2.36 (j→ṣ) 及び P 8.4.41 (t→ṭ) をへて mārṣti が派生されることとなる。

P 1.1.1 vṛddhir ādaic // は、他の規則とは異なり、その語順が変則的である。一般に、パーニニ規則は、samjñāsūtra の場合、uddeśya — vidheya, samjñin — samjñā の語順を取るが、この規則においては、それが逆転し、vidheya — uddeśya, samjñā — samjñin の順となっている。これについては、Aṣṭādhyāyī アシュタ・アドヤーイーという文法の中の最初の規則であるこの規則の最初に、「繁栄・増大」等を意味する ‘vṛddhi’ という語を吉兆のために (maṅgalārtha)、パーニニは配置したのだ、というのが伝統的な解釈である。また、この規則の ‘ādaic’ に関して、複合語であるのかないのか、などの種々の解釈を注釈は列挙するが、詳細は省略する。それはさておき、vidhi (目下の場合それはパーニニ規則である) は、一般に、uddeśya — vidheya の構造をとり、uddeśya は prāpta であり、vidheya は aprāpta である。<sup>11)</sup> ここで、kāryapakṣa に立つならば、vṛddhi の samjñin である āT もしくは aiC、目下の mārṣti の場合 oT は、P 7.2.114 mrjē vṛddhiḥ // の適用によって生ぜしめられるものである。したがって、この規則の適用以前には、samjñin である āT および aiC は、存在しない。その段階では、その āT もしくは aiC は、P 7.2.114 の適用の後、という「将来に生じる (bhāvin)」ものである。そうするならば、P 1.1.1 における、prāpta であるはずの uddeśya は、未だ知られて

いない (aprāpta) ものであることになってしまう。そうするなら、P 1.1.1 vṛddhir ādaic // によって制限されている vṛddhi という語のシャクティの把握は、不可能となる。上述 mārṣṭi の派生の過程において、問題は、P 7.2.114 mṛjē vṛddhiḥ // による ṛ 音に対する ā 音の代置の段階にある。この規則では、vṛddhi という名称を用いて ā の代置が述べられている。しかし、ā 音の代置がなされる以前の段階においては、どこにも ā 音は存在しない。あるのは、mṛj + ti であり、そこに vṛddhi と呼ばれる ā 音は存在しない。実在する ā, ai, au に対して名称 vṛddhi が関係づけられるのであれば、名称と名称保持者という両者の間の関係を捉えうることに疑問はない。しかし、vṛddhi に関係する ā 音は、実在しないのであるから、それら両者の間の関係は成り立たないようにおもわれるし、また、その関係の把握も不可能であることとなろう。つまり、vṛddhi という名称によって、ā がもたらされるのに、同時にそれによってもたらされるはずの ā 音が vṛddhi と呼ばれる、という点に、相互依存があるのである。『パーシャ』は次のように述べている。

satām ādaicām samjñayā bhavitavyam samjñayā cādaico bhāvante /  
tad etad itaretarāśrayam bhavati / itaretarāśrayāṇi ca kāryāṇi na  
prakalpante / tad yathā naur nāvi baddhā netaretaratrāṇya bhavati /  
(MBh II on P 1.1.1, p.166, R. lines 1-4)

つまり、実在する (sat) 音素 āT 及び aiC に関して、名称がもたらされるべきであるのに対し、名称によって、āT 及び aiC がもたらされていると考えられる。したがって、ここに相互依存誤謬発生が疑われる。そして、相互に依存する文法操作 (kārya) は、上手くいかないと考えられる。<sup>12)</sup> 上記の『パーシャ』では、例として繋がれた二艘の船の事例を取りあげている。

ここで、「実在する (sat)」とは、Nāgeśa によれば、「生ぜしめられた (niṣpanna)」という意味である。したがって、この相互依存誤謬の指摘は、非恒常論 (kāryapakṣa) の立場からなされているということが出来る。

この問題を Nāgeśa の理解にしたがって、いまして整理してみよう。kāryapakṣa においては、文法操作によって、その都度言葉が作りだされるのであるから、vṛddhi という名称に基づいて、āT もしくは aiC が作りだされる以前の現在には、それら名称保持者である āT もしくは aiC は存在していない。それは、生起の後、つまり、未来に属している、と考えられる。名称と名称保持者の関係は、それら両者が存在している場合に成り立つと考えられる。したがって、関係項の一方が未来に属し、現在には存在していないならば、関係の把握はありえず、したがって、名称保持者の理解もあり得ない。vṛddhi という語のシャクティの把握 (śaktigraha) によって āT と aiC が生起する。そして、同じく vṛddhi という語のシャクティの把握によって関係の認識がある。そうするなら、āT もしくは aiC の生起 (utpatti) と関係 (sambanda) の認識 (jñapti) の間には、相互依存 (anyonyāśraya, parasparāśraya) が存在する。というのは、シャクティの理解によって āT もしくは aiC が生起し、それがなければ、関係の認識はあり得ず、同時に関係の認識なくしては vṛddhi という名称に基づく āT もしくは aiC の生起はありえないからである。名称保持者である āT もしくは aiC の生起には関係の認識が先立たねばならず、一方、関係の認識には、名称保持者である āT もしくは aiC が先立たねばならない。つまり生起していなければならない。これが、ここで問題となっている相互依存の構造であるということが出来る。

ところで、この問題は、語恒常論に立脚すれば、最初から問題とはならない。というのは、先にみたように、我々の知 (buddhi) において、śabdārthasambandha は常に成り立っているからである。『パーシャ』は、vt 9 on P 1. 1. 1 siddhamtu nityaśabdatvāt に対して、次のように述べている。

『言葉は恒常である。言葉が恒常である場合に、存在する āT と aiC に名称が与えられる。[一方] 名称によって āT と aiC が生ぜしめられるのではない。』(MBh on P. 1. 1. 1 vt 9 nityaśabdatvāt / nityaḥ śabdāḥ, nityeṣu śabdeṣu satām ādaicāṁ samjñā kriyate, na samjñāyā ādaico bhā-

vyante //)

ここで、言葉 (śabda) が常住 (nitya) であるとは、言葉が文法操作によって作り出されるものではない、ということである。つまり、恒常論に立脚すれば、ā, ai, au 等を含んだ語形は、常に我々の観念の中にあり、それらは、vṛddhi という名称によって、作り出されているのではないのである。したがって、ここに相互依存誤謬といったものの入り込む余地はない。

ところで、『パーシャ』や『カーシカー』 (Kāśikavṛtti) 及びそれらに対する注釈家の指摘によれば、相互依存誤謬は、vidhi に関して問題となる。一方、再言 (anuvāda) の場合には問題とはならない、といわれている。このことについて、述べておかねばならない。たとえば、この P 7.2.114 mrjē vṛddhiḥ // は、vidheya に 'vṛddhiḥ' が位置している。先述のように規則は、基本的に uddeśya — vidheya の構造をもつ。uddeśya は prāpta (or siddha) であり、vidheya は aprāpta (asiddha) である。したがって、vidheya に名称 vṛddhi が位置している場合、この規則は意味をなさないこととなろう。しかし、anuvāda の場合には、anuvādyā である uddeśya は、すでに、なんらかの方法によって、知られている。いいかえれば、他の操作規則の適用によって、既に知られているのであるから、この場合問題は生じないであろう。

ここまで、論じて来た P 1.1.1 は、Patañjali が、冒頭規則ということも手伝って、長大な注釈を施していることから明らかなように、種々の興味深い問題を含む規則である。しかし、目下の議論においては、少なくとも、vṛddhi と ā, ai, au の対応を述べている、という点では比較的単純である。そしてそこで発生する相互依存誤謬は、常住論の立場からは問題とならない。しかしながら、上述の P 1.1.1 とは、事情が異なる規則がある。すなわち、たとえば、その名称規定規則自体が、なんらかの形で原要素代置要素関係 (sthānyādeśabhāva) を前提とする規則の場合である。なにかある原要素に代置要素がとってかわる、ということを経験すれば、常住論の立場に立つこと自体に困難が生じる様に思われるからである。

例えば、P 1. 1. 45 *ig yaṇaḥ samprasāraṇam //*。この規則は、いわゆる「半母音の母音化」という現象に関わる。そして、この規則は、一般的には、二通りに解釈される。<sup>13)</sup> 一つの解釈は、半母音 (yaṇ=y, v, r, l) に代置された母音 (iK=i, u, r, l) を *samprasāraṇa* という名称をもって呼ぶ、というものである。いま一つの解釈は、yaṇ に対して iK が代置される過程そのもの、いいかえれば、yaṇ に iK が代置される現象そのものを名称 *samprasāraṇa* をもって呼ぶ、とする解釈である。この二つの解釈は、それぞれの操作規則の規定内容に従って、双方の解釈が随時要請される。この規則の実際の適用例を検討して見よう。

*iṣṭa-*(√*yaj* の過去受動分詞) の派生過程をみてみよう。√*yaj* (DhP 1. 1051 : *yaja vedapūjāsamgatikaraṇadāneṣu*) のあとに P 3. 2. 102 *niṣṭhā //* により *Kta* が導入される。この *Kta* の導入に際しては、P 3. 1. 91 *dhātoḥ //* P 1. 1. 26 *ktaktavatū niṣṭhā //* P 3. 2. 84 *bhūte //* P 3. 4. 70 *tayor eva kṛtyaktakhalarthāḥ //* 等の諸規則が考慮される。その後、*Kta* は *KIT* (*K* を *IT* とする) 接辞であるから、*yaj* + *Kta* の段階で次の規則が適用される。P 6. 1. 15 *vacisvapiyajādīnām kiti [13 samprasāraṇam] //*。この規則は、√*vac*, √*svap*, 及び DhP 中の √*yaj* 以下のものに *KIT* 接辞が後続する場合、それらの yaṇ に *samprasāraṇa* が代置される、ということを規定している。従って、*yaj-* の *y* に母音 *i* が代置され *i + aj + ta* となる。そして、P 6. 1. 108 *samprasāraṇāc ca [KV aci parataḥ pūrvaparayoḥ sthāne pūrvārūpam ekādeśo bhavati] //* により *i + aj + ta* の *i* と *aj* の *a* の双方に前者 (つまり *i*) が代置される。そして、*i + j + ta* となる。さらに、P 8. 2. 36 及び P 8. 4. 41 の適用をへて、*iṣṭa-* が派生される。

ここで問題があるのは、P 6. 1. 15 *vacisvapiyajādīnām kiti [←13 ṣyaṇaḥ samprasāraṇam] //* の適用の段階においてである。P 1. 1. 45 が、yaṇ に代置された後の音素 *iK* を名称 *samprasāraṇa* の名称保持者と規定しているのであれば、*yaj* + *ta* の段階では yaṇ の代置要素である *samprasāraṇa* と呼ばれる *iK* はどこにも存在しないのであるから、*y* に代置される *i* は *samprasāra-*

na とは呼ばれない。したがって、samprasāraṇa という術語を用いて規定されている y に対する i の代置は起こり得ないこととなる。そこに相互依存が生じているからである。つまり、術語 samprasāraṇa によって samjñin である i 音もたらされるのに、その術語 samprasāraṇa によってもたらされたところの i 音を samprasāraṇa と呼ぶ、ということになっている。そして、この規則の場合、yaṅ に対する iK 代置の過程を名称保持者とする解釈が要請される。これにより、とりあえず問題は回避されることとなる。しかし、そうするなら、次に問題となるのは、P 6.1.108 samprasāraṇāc ca // である。もし、代置の過程が、つまり yaṅḥ sthāne ik bhavati という文の意味が samprasāraṇa という名称の保持者なのであれば、それに後続する音素というものは、ありえない。この点について、『パーシャ』は、鳥から生まれるものが「鳥」と呼ばれるように、文の意味である samprasāraṇa からうまれるところの音素 iK もまた、samprasāraṇa という名称の保持者であることに問題はない、というような、三つの解決策を与えている。

しかし、P 1.1.1 の下で論じたように、音素が常住であるとすれば、当然ながら iK も常住であり、それにたいして samprasāraṇa という名称が適用されることに疑問はないのではないか。ここで、先述の原要素代置要素関係というものがからんでくる。P 1.1.1 の場合は、この名称規定規則 (samjñāsūtra) が関わる操作規則 (vidhisūtra) の適用を経ない本来的な名称保持者が存在する。しかし、P 1.1.45 の場合は、本来的に名称 samprasāraṇa を有する名称保持者、たとえそれが半母音に代置された母音そのものであっても、また代置の過程であっても、そういう名称保持者は、存在しない。あくまでも、samprasāraṇa という名称の名称保持者は、目下の P 1.1.45 およびその関わる操作規則の適用の結果、samprasāraṇa という名称を得るのである。

この点を KV は名称について、「既に存在している (bhūta)」と「これから将来に存在する (bhāvin)」という二つの区分をなすことにより解決している。即ち次のように述べている。

『yaṅ の場所に、既に存在している (bhūta) かまたは将来存在する (bhāvin) iK に関して、samprasāraṇa というこの術語がある。』(KV on P 1. 1. 45 ig yo yaṇṇ sthāne bhūto bhāvī vā tasya ‘samprasāraṇam’ ity eṣā sarīññā bhavati /)

この KV を注釈して、PM は次のように述べる。

『他の文法操作の為に再言されている (anūdyamāna) ところの [iK] は、既存 (bhūta) であり、一方 vidheya [である iK] は将来存在 (bhāvin) である。この場合、[iK という] samjñin が将来存在するのであるから、[samprasāraṇa という] 名称 (samjñā) も将来にある (bhāvinī)。例えば、「この糸で布を織ってくれ」という場合のように』<sup>15)</sup>

ここで、PM は布と糸を用いた例を挙げている。これは、同規則に対する『パーシャ』においても挙げられている例である。これは、非常に卑近な例であり、目下の名称 (samjñā) と名称保持者 (samjñin) の関係に関わる問題を的確に表している。ある人が機織職人に布を織ることを依頼する場合を考えて見よう。このとき、その依頼者は、糸を持参し、職人に対して「この糸で布を織ってくれ (tasya sūtrasya śāṭakam vaya)」というであろう。しかし、この場合の「布」という名称は何に対して適用されたものなのか。これから布を織る必要があるのなら、そこには「布」と呼ばれるもの、つまり名称「布」の保持者 (samjñin) は存在しないはずであり、もし、存在するのなら、布を織る必要はないはずである。「この糸で布を織ってくれ」という場合に、その時点でそこにあるのは、あくまでも、布ではなく、糸である。そういうわけで、この場合の「布」との名称 (samjñā) は、将来存在するであろうところの織られた布に対する名称であると考えねばならない。

ところで、上述の KV は将来術語に頼らない P 1. 1. 45 の解釈も示している。<sup>14)</sup> この解釈は、目下の P 1. 1. 45 を二通りに理解する。まず最初の解釈は、

‘ig yaṇaḥ’ という文の意味 vākyārtha、つまり、yaṇ に iK が代置される過程を samprasāraṇa と呼ぶ解釈、つまり、vākyārtha が samjñin であると考えられる解釈である。いまひとつの解釈は、音素 (varṇa)、つまり、yaṇ に代置されたところの iK そのものを samprasāraṇa と呼ぶ、つまり、yaṇ に代置されたところの音素 iK を samjñin と考える解釈である。これら二つの解釈は、vidhi の場合と anuvāda の場合にそれぞれ分類される。つまり、P 6. 1. 13 ṣyaṇaḥ samprasāraṇam // や P 6. 4. 131 vasoḥ samprasāraṇam // など、vidheya に samprasāraṇa という名称が位置している vidhi の場合には、vākyārtha が名称保持者であり、一方、再言 (anuvāda) である P 6. 1. 108 samprasāraṇāc ca // の場合には音素 iK が名称保持者である。<sup>16)</sup> この再言の場合、なんらかの別の規則によって yaṇ に iK が代置されており、その yaṇ に既に代置されたところの iK に対して、更になんらかの別の文法操作がなされることを規定している。したがって、それら名称保持者である音素 iK と名称である samprasāraṇa の間の関係は問題なく把握されるわけである。しかし、この場合は、ひとつの規則を二通りに解釈しなければならない。

ところで、音素を名称保持者とする場合において bhūta および bhāvin を設定する解釈と、それを設定しない解釈とは、それぞれ、よって立つ基本的な立場が異なる。前者、つまり、名称保持者に bhūta と bhāvin を設定する解釈は、語非恒常論 (kāryapakṣa) にたっているのであり、後者は語恒常論 (nityapakṣa) に立っているのである。恒常論の立場では、言葉が文法規則もしくはその操作によって生みだされるということはないのであるから、糸と布の事例のような、将来の個物に適用されるところの名称というものを、特別に設定する必要はない。言葉 (śabda)、意味 (artha)、そしてそれらの関係 (sambandha) は、知 (buddhi) に存するものとして、常に成立しているからである。しかし、非恒常論に立つなら、言葉と意味の関係は、その都度個々の個物に関して確立される。その場合、未来にある個物と言葉との関係を捉えることは、現在においては不可能である。したがって、将来名称 (bhāvisamjñā) の導入が必要となるのである。

## 4.

Nāgeśa は、P 1. 1. 1 に対する Uddyota において、次のようなことを述べている。糸と布の例の場合のように、将来名称を設定することによって vidhi の領域においても、それら規則という文の意味の認識が可能である。つまり、布の生起 (utpatti) の直後に、それに対するシャクティが把握されるところの布との同類性に基づいて、「布」という語に存するシャクティの理解がある。同じように P 1. 1. 1 においても同じことがいえる。しかし、実際上の (vāstava) 回避策を『バーシャ』は「言葉は常住であるから (nityaśabdāt) 等によって述べているのだと。<sup>17)</sup> ここで、言葉が常住であるとする説に基づく相互依存誤謬回避と将来名称の導入によるその回避の間には、レベルの違いがあることが明確に示されている、ということが出来る。言葉 (śabda) が常住 (nitya) である、という場合には、名称 (samjñā) に関して、bhūta や bhāvin ということ述べる必要はない。なぜなら、その場合、上述のように、それぞれの認識者の知 (buddhi) において、言葉とその対象である意味、そしてそれら両者の関係は常に成立しているからである。一方、bhūta や bhāvin ということが述べられる場合には、非常住論 (kāryapakṣa) によっていると考えられる。その場合には、「この糸で布を織ってくれ (asya sūtrasya śātkam vāya)」と誰かが機織職人に頼む場合の例のように、個物としての布が考えられており、未来のものである (bhāvin) その布に適用される名称 (samjñā) もまた、未来のものである (bhāvin) である、というのである。この場合、明らかに、「布 (śāta) という名称は、恒常 (nitya) なるものとは考えられず、その都度、個物としての布に対して、生ぜしめられるものと考えられているのである。<sup>18)</sup>

## 〈参考文献・略号〉

BM : Bhāsudeva Dikṣita's *Bālamānoraṃā*. SK 所収。

KV : Miśra, Śrīnārāyaṇa (ed.), *Kāśīkāvṛtti*, 6 vols., Varanasi, 1985.

MBh I : Kielhorn, F. (ed.), *Vyākaraṇamahābhāṣyam*, Poona, 1962 (third ed.)

- MBh II : NSP ed. vol. 1. (reprinted, 1987, Delhi.) (R=右欄、L=左欄)
- NK : *Nyāyakośa*, 4th ed., Poona, 1978.
- Nyāsa : *Nyāsa*. KV 所収。
- NS : *Nyāyadarśana* , 2 vols., Calcutta, 1936-1944.
- Oberhammer : Oberhammer, G., *Terminologie der frühen philosophischen Scholastik in Indien*, Band 1, Wien, 1991.
- Paspaśa : S. D. Joshi and J. A. F. Roodbergen, Patañjali's *Vyākaraṇa-Mahābhāṣya Paspāśāhnikā*, Pune, 1986. (Publications of the Centre of Advanced Study in Sanskrit, Class C, No. 15)
- PM : Padamañjari. KV 所収。
- PbhS : Abhyankr, K. V. (ed.), *Paribhāṣāsamgrahaḥ*, Poona, 1967.
- Pradīpa : Kaiyaṭa's *Pradīpa*. MBh II 所収。
- Sharfe : Sharfe, H., *Die Logik im Mahābhāṣya*, Berlin, 1961.
- SK : Giridhara Śarmā Caturdeva and Parameśavarānanda Śarmā Bhāskara (ed.), *Vaiyākaraṇasiddhāntakaumudī*, 4 vols., Dehli, 1958-1961.
- Uddyota : Nāgeśa's Uddyota. MBh II 所収。
- Y. Ojihara et L. Renou : *LĀ KŚIKĀ-VṚTTI*, 3 vols., Paris, 1960-1967.

### 註

- 1) このようなインド言語理論に関する概説は、服部正明他「4言語と意味の考察」『岩波講座 東洋思想』7、1989、pp. 65-155 を参照せよ。
- 2) 相互依存を意味する語として、anyonyāśraya の他に、anyonyasamśraya, itaretarāśraya, parasparāpekṣā 等の使用例が見られる。これらの語は、特定の分野やテキストで用いられる特殊な用語というわけではなく、広い範囲で用いられている。Oberhammer を参照せよ。'anyonyāśraya' のもととなる anyo'nyam は次の規則およびヴァールティカ (Vārttika. 以下 vt) によって説明される。P 8.1.12 prakāre guṇavacanasya // [8.1.1 sarvasya dve, 8.1.11 karmadhārayavat] 『[ある] 様相を意味する場合、性質を表す語に [繰り返し] が代置される。カルマダーラヤのごとくに扱われる』]。この規則に対して次の vt が述べられている。vt 12 on P 8.1.12 karmavyatīyāre sarvanāmaṇṣ samāsavac ca bahulam yadā na samāsavat prathamaikavacanam tadā pūrvapadasya // Nyāsa によれば、karmavyatīhāra とは kriyāvinimaya であり、つまり行為 (kriyā) が相互に行き交う、そういう場合に、代名詞 (sarvanāman) が繰り返される。KV は「これらのブラーフマナ達はお互いに食

べさせあう (anyo' nyam ime brāhmaṇā bhojayanti)」という例をあげている。辞書の記述ではあるが、*Śabdakalpadruma* は anyonyaśraya を 'anyonyam āśrayati, anyonya + ā + śri + pacādy ac' と分析している。anyo'nyam は、anyam という第二系列語尾で終わる語形が二回繰り返された後、それらは複合語としては扱われず、目下の vt にしたがって前分のあとに単数第一形列語尾 (prathamaikavacana) が導入される。anya + sU anya + am。複合語として扱われない場合、P 2.4.71 supo dhātuprātipadikayoḥ // の適用はなく、sU 及び am に LUK (φ) は代置されない。これを目下の vt に対する Pradīpa は次のように述べている。Pradīpa on P 8.1.12 vt 12 / ... samāsavadbhāvas tu bahulam / tatra bahulagrahaṇād anyonyaśabde samāsavadbhāvā 'bhāvāt sublug na bhavati ... /

- 3) tarka の語義については、NS 1.1.40 で述べられる tarka に対して、後代に帰謬の意味が付与されるに至る過程を述べた、山上證道、「Nyāya 学派における tarka の語義」『印佛研』28-2, pp. 911-908, 1980. を参照のこと。また、Viśvanātha の *Nyāyasūtravṛtti* は、NS 1.1.40 (NS, vol. 1, p. 320ff.) を注釈する際に、そこで述べられている tarka を望ましくない結果 (aniṣṭaprasaṅga) とした上で、ātmaśraya, anyonyaśraya, cakraka, anavasthā, tadanyabādhitharthaprasaṅga の五種に分類している。そこでさらに anyonyaśraya は、utpatti, sthiti, jñapti に分類されている。またミーマーンサー学派の綱要書 *Mānameyodaya* (ed. by C. Kunhan Raja and S. S. Suryanarayana Sastri, Madras, 1933. p. 39f.) においても、ātmaśraya 等が tarka の下で分類されている。また、ミーマーンサー学派のタントラヴァールツェティカにおいても、相互依存誤謬が論じられている。これについては、針貝邦生『古典インド聖典解釈学研究』九州大学出版会、1990, pp. 184. を参照のこと。
- 4) 以下の議論は BM on P 1.3.3 に基づく。BM は *Siddhāntakaumudī* (SK) に対する注釈であり、Paṇini の *Aṣṭādhyāyī* からみれば復注となる。したがって本来 BM on SK 云々と表記すべきであるが、参照の便宜上、被注釈文献として *Aṣṭādhyāyī* のストラ番号を示す。その他の場合も復注以降の注釈を示す場合は、同様に表示する。例えば Uddyota on P 1.1.1 等。なお目下の P 1.3.3 のその他の解釈の概略については R. Sharma, *The Aṣṭādhyāyī of Paṇini*, vol. 2, p. 141f, Delhi, 1990. を参照されたい。
- 5) 以下便宜上、これら IT と呼ばれる項目を大文字をもって表す。例えば hal はそこに IT を含まないが、haL の最後にある大文字で表記された L は IT であることをあらわす。この IT と呼ばれる項目には、P 1.3.9 tasya loṇaḥ // により <loṇa> (φ) が代置され、実際の言語運用の際にそれらが経験されることはない。

6) 以下の議論の詳細については、カイヤタ (Kaiyata)、ナーゲーシャ (Ngeśa)、さらにバルトリハリ (Bhartṛhari) の作といわれる *Mahābhāṣyadīpikā* の解説を含んだ Paspāśa p. 85ff. を参照せよ。ちなみに、この言葉の常住性・所作性の問題は、後述する解釈規則集 *Paribhāṣāsūcana* の作者 (または編纂者) であるとされるビヤーディ (Vyādi) の、『サングラハ (*Samgraha*)』と呼ばれる著作の重要な課題の一つであったといわれている。ただし、この文献は現存しない。これについては、MBh I, p. 6, lines 12-13. Paspāśa p. 89, fn. 325 を参照のこと。また、バルトリハリの、言葉の恒常性に関する、*kūṭasthanityatā* (不動恒常) や *pravāhanityatā* (流れ恒常) 等の見解、非恒常性に関する見解については、K. A. S. Iyer, *Bhartṛhari*, Poona, 1969, p. 74 を参照せよ。

7) MBh I, p. 6, line 28.

8) MBh II, p. 64, R. lines 2-4 : atha vā kiṃ na etena idam nityam idam anityam / yan nityam taṃ padārthaṃ matvaiṣa vighrahaḥ kriyate siddhe śabde 'rthe ssambandhe ceti //

Pradīpa thereon : yan nityam iti / buddhipratibhāṣaḥ śabdārthaḥ / yadā yadā śabda uccāritas tadā tadārthākārā buddhir upajāyate iti pravāhanityatvād arthasya nityatvam ity arthaḥ /

Uddyota thereon : yan nityam iti / vyaktijātyakṛtīnām madhye yan nityam ity arthaḥ / nanu śaśaṣṅgādīpadārthanām kathaṃ nityatvaṃ teṣāṃ svarūpasyaivābhāvād ata āha buddhipratibhāsa iti / bāhyaḥ padārtho na śābdabodhe viśayaḥ, kiṃ tu bauddhaḥ / sa ca pravāhanitya iti bhāvaḥ /

10) 解釈規則 P 1. 1. 3 iko guṇavṛddhi // が考慮される。また、〈aṅga〉とは、P 1. 4. 13 yasmāt pratyayavidhis tadādi pratyaye aṅgam // によって規定されることの接辞に先行する部分のことであり、P 6. 4. 1 aṅgasya // という支配規則の支配下に P 7. 2. 114 はある。KV がいう dhātupratyaya を Nyāsa は「動詞語根の後に、というように規定されたものが動詞接辞である」(yo hi dhātor ity evaṃ vihitam sa dhātupratyayaḥ) と注している。

11) vidhi の構造については、小川英世、「文法家ミーマーンサカ」『哲学』38集、1986. を参照せよ。

12) ここで、パーシャは、「相互に依存する文法操作は上手くない (itaretarāśrayāṇi ca kāryāṇi na prakalpante)」と述べている。ところが、パーニニとカーツヤーヤナの間の時代に位置するとされている Vyādi の *Paribhāṣāsūcana* など、相互依存でも問題はない、との考えを示す解釈規則 (*paribhāṣa*) がある。それらは、上記パーシャカ

ら否定辞 ‘na’ を除いた ‘itaretarāśrayāny api kāryāni śāstreṣu prakalpante’ とほぼ同じ表現をとる。しかしながら、それらも全面的に相互依存でも問題はないと考えているのではないのである。例えば、Puruṣottama の *Laghuparibhāṣāvṛtti* に対する注釈は、規則中の *api* を「ある場合に *kvacit*」の意味であるとし、さらに矛盾 (*virodha*) がない場合には相互に依存するものも機能する (*yatra virodho nāsti tatra itaretarāśrayāny api pravartante* /) と述べている。これらの解釈規則は、相互依存の構造を解きほぐし、問題がないことを示した上で、それらを受け入れているのではなく、あくまでも便宜的に相互依存を容認しているにすぎないように思われる。

また、上述のごとき解釈規則は、パーニニ派における解釈規則の集大成であるナーゲーシャパーッタの解釈規則集『パリパーチャー・インドゥ・シェーカラ』(*Paribhāṣendusekhara*) には取り上げられておらず、パーニニ文法学のなかで、それらの解釈規則がどのように取り扱われてきたのかを今の段階で明確にはできない。しかし、テキストに否定辞 *na* を入れる異読があることも、この解釈規則がパーニニ文法学の伝統の中に、そのままの形で受入られているものではなかったことをうかがわせる、ということは出来るように思われる。Vyādi の年代等については、PbhS の Introduction を参照のこと。なお、同書に挙げられている解釈規則集の中で、同様の規則を含むものは、*Śakāṭayanaparibhāṣasūtrāṇi* 28 (p. 44), *Laghuparibhāṣāvṛtti* 96 (p. 152), *Bṛhatparibhāṣāvṛtti* 3 (p. 166) (ただし、その注釈 *Bṛhatparibhāṣāvṛtitiṭṭippanī* は *itaretarāśrayāni kāryāni na prakalpante* と *na* を含んだ規則を被注釈文に反して挙げている。)、*Paribhāṣābhāṣaka* 3 (p. 319) である。

- 13) MBh II, p. 392, L: kim iyaṁ vākyasya samprasāraṇasamjñā kriyate ig yaṇa ity etad vākyam samprasāraṇasamjñam bhavatīti / āhosvid varṇasya ig yo yaṇaḥ sthāne varṇaḥ sa samprasāraṇasamjño bhavatīti /
- 14) KV on P 1. 1. 45: ... / kecit ubhayathā sūtram idaṁ vyācakṣate—vākyārthaḥ samjñī, varṇaś ceti //  
Nyāsa thereon: kecit ityādinā ye bhāvinīm samjñān nāśrayanti tanmatam darśayati / ... /
- 15) PM on P 1. 1. 45: bhūta iti / kāryāntarārtham anūdyamāno bhūtaḥ, vidheyas tu bhāvi, tatra ca samjñīno bhāvitvāt samjñāpi bhāviny eva / yathā {asya sūtrasya śātakam vaya} iti /
- 16) 実際の操作規則において名称 *samprasāraṇa* が、P 6. 1. 13 *ṣyaṇaḥ samprasāraṇam* // などの場合のように、第一系列語尾 (*prathamā vibhakti* 主格語尾) をともなって提示されている規則の場合は、文意が名称保持者 (*samjñīn*) である。そ

して、たとえば P 6. 1. 108 samprasāraṇac ca // 等の場合のように、第一以外の系列語尾をともなって提示されている場合は、yaṅ に代置されたところの iK という音素 (varṇa) が名称保持者である。(Uddyotana, p. 266, lines 7-8, līṅgeti / pradeśeṣu 'ṣyaṇaḥ samprasāraṇam' ityādiprathamānirdeśo vākyārthasamjñāyām līṅgam / 'samprasāraṇac ca' 'samprasāraṇasya' ityādivibhaktiyantarānirdeśo varṇasya samjñāyām /) 文が名称保持者である、とパーシャは述べるが、そこで「文 (vākya)」によって意図されているのは、文意 (vakyārtha)、つまり、「yaṅ に iK が代置される過程」である。そうでなければ、P 6. 1. 13 ṣyaṇaḥ samprasāraṇam // を例にすれば、Ṣyaṅ に 'ig yaṇaḥ' という文そのものが代置されてしまうという奇妙なことになる。

17) Uddyota on P 1. 1. 1 yady apy {asya sūtrasya śātakam vaya} ityādāv iva bhāvisamjñāvijñānena sidhyati, yathā ca tatrotpattyanantaram gṛhītaśaktikaśātakasādṛśyāc chātakapadaśaktigrahas tathā prakṛte 'pi spaṣṭam cedam P 1. 1. 45 ig yaṇa...// iti sūtre bhāṣye, tathāpy atra vāstavam eva parihāram āha—bhāṣye—siddham tv iti / etac ca majñūṣāyām vistareṇa nirūpitam //

18) 言葉 (śabda) が恒常 (nitya) であるとするなら、文法学という学術は、無用になるのではないか、という疑問が当然生じる。これに対する一つの回答は、恒常である言葉の正しさ (sādhutva) を、文法を通してしることが出来る、というものである。詳しくは、P 1. 1. 1 及び P 1. 1. 45 に対するパーシャを参照のこと。

*Samjñāsamjñīsambandha* in Indian Grammar  
: From the viewpoints of the *nityapakṣa* and the *kāryapakṣa*

HONDA, Yoshichika

In Indian linguistic thought, the question as to whether the word (*śabda*) is *nitya* 'permanent' or *kārya* 'to be produced' (= *anitya*) has been discussed from a long time. The Grammarians (*vaiyākaraṇa*) also discuss this. And these two viewpoints are reflected in the interpretations or the operations of the grammatical rules (*sūtra*).

In this paper, we are concerned with *samjñā* 'the name', *samjñīn* 'the named' and their *sambandha* 'relation' from these two views.

In order to understand what is named, we have to seize the relation between *samjñā* and *samjñīn*. If there were not *samjñīn*, then there would not be the relation and we could not understand it.

Patañjali, in commenting upon *P 1. 1. 1 vṛddhir ādaic*, says that the phonemes *āT* and *aiC*, the *samjñīn*, are produced (*bhāvyaṅte*) by the name *vṛddhi*, and *āT* and *aiC*, which are produced, are called by the name *vṛddhi*. If the word is to be produced (*kārya*), we do not have *samjñīn* before the production of it. Here, we have to face the mutual dependence (*itaretarāśraya*) as fallacy between the production (*utpatti*) of the phonemes, *āT* and *aiC*, and their understanding (*jñapti*).

This fallacy results from *kāryapakṣa*. In *nityapakṣa*-view, Patañjali on *P 1. 1. 1 vt 9 siddham tu nityaśabdatvāt* says that *nityeṣu śabdeṣu satām ādaicām samjñā kriyate na samjñāyā ādaico bhāvyaṅte*. Since the word is not what is produced, and the relation between *samjñā* and *samjñīn* are perma-

nent (*nitya*) in our mind (*buddhi*), there is no room for the mutual dependence in this view.

The *Kāśikāvṛtti* on *P 1. 1. 45 ig yaṇah samprasāraṇam* // gives two sorts of classification of the *samjñā* and the *samjñin*: *bhūta* 'which has taken place' and *bhāvin* 'which is still to take place'. This classification is introduced by the view point of *kāryapakṣa*. In *nityapakṣa* there is no need for considering the concept of *bhūta* and *bhāvin*. Because *samjñā* and *samjñin* are permanent in our mind.